

Thomas Hylland Eriksen 2014 chapter 23 Public Anthropology. In Russell Bernard and Clarence Gravlee (eds.), *Handbook of Methods in Cultural Anthropology*. Thousand Oaks: Rowman & Littlefield Publishers, pp. 719–734.

トマス・エリクセン「公共人類学」

## 序 pp.719–720

・講義や出版物などあらゆる人類学はある意味では公共的と言えるが、「公共人類学」とは学術的な境界を越えて伝えることをめざす学問分野内部の特定の実践と立場を指す。

- ローカルコミュニティでの権利擁護志向 (advocacy-oriented) の仕事に関与する聴衆に向けて書いたり、世界の病気についての公共的で国際的な対話に干渉したりする。

・こうした実践の共通分母は、人類学者は学術的な知識の追求だけでなく、政治的とまではいかなくとも世界と実践的にかかわるべきだという信念である。

- ボロフスキーの公共人類学の Web プロジェクト<sup>1</sup>では、「今日のジレンマの再フレーム化および緩和（必ずしも解決するわけではない）に人類学者が提供しうることを、学問分野を超えた他者が理解できるようなやり方に批判的に取り組む」活動とされる。

・言い換えれば、公共人類学は、閉鎖的な専門家集団の人類学の共同体と、人類学が研究し、人類学者が参加している、グローバル社会の間との橋渡しの試みを構成する。

- この章は方法論的な見地から公共人類学の主要な形態を議論する。

## 過去の罪と美德 pp.720–722

・人類学とより広い公衆との関係には長い複雑な歴史がある。

- 人類学は 19 世紀には探検や植民地化の付随物として遂行されてきたが、20 世紀に制度として確立すると、人類学者は専ら文化や社会を研究するようになった。
- 19 世紀の人類学者たちは現在の意味での公共人類学者ではなかったが、彼らの書き物は普通の読者から政策立案者まで様々な公衆と関係していた。その後、人類学の制度化が進み、自然科学のように自己完結するようになった。
- しかし、開放性から閉鎖性へと直線的に進んだわけではなく、例えば、ボアズやミードは 20 世紀の公共人類学者であったし、マリノフスキーは未開の経済についての講義を大学外で行い、モースは社会主義者としてフランス政治に関与した。

・さらに応用人類学は第二次世界大戦の前からサブフィールドであり続けてきた。

- 1961 年まで英国植民地社会科学研究会議から応用的な研究は助成を受けていた。
- 人類学の方法と知識は、政府やビジネスリーダーから重宝されてきた。

---

<sup>1</sup> <https://www.publicanthropology.org/>

- 最近では米軍の人間領域システム (Human Terrain System : HTS)  
→対アフガニスタン、イラク戦争への関与について、米人類学者の間では論争がある。
  - ある意味で、人類学者は常に人類学の外部に関与してきたが、それは時折、外部に関与する人類学者の周縁化をももたらしてきた ( :「基礎 (pure) 研究>応用研究」)。
- ・公共人類学は新しいものではないが、近年、「基礎／応用」の区別という当然視されてきた区別の問題化や、人類学の学術外での妥当性についての反省的な言説が生じている。
- それは 80 年代からグローバル・サウスの人々が自らの歴史、文化、アイデンティティに反省的な視点を向け始めて人類学者の著作を参照する状況と関連する。
  - こうした状況で、「知るわれわれ」と「研究の対象である彼ら」という虚構は維持できなくなり、ボーダーレスな状況になったことで、以下の困難な問いが生じてきた。
    - ◇ 誰が正当に何を言うことができ、誰のためにそれを言うことができるのか？
    - ◇ 優れた民族誌を測る基準は何か？
    - ◇ 人類学者は彼らが研究する社会に何を提供することができるのか？
    - ◇ 人類学的研究と研究中の社会的文化的な世界との間の正確な関係は何か？

### 公共人類学は「関与」しなければならないのか？pp.722-723

- ・ボロフスキーの「社会変化をもたらすという公共人類学の明白な目標」に著者自身ははっきりと同意できない。
- それよりも、明確な政治的メッセージなしに、世界の新たな視点を獲得できる新たな問いを出すことが公共人類学の役割だと著者は考える。
  - 慣れ親しんだものへ人類学が向ける視線は破壊的で、疎外感を産み出す。それは、自己批判を導き、社会変革という観点からの成果は明白ではなくなる。
  - 関与人類学 (an engaged anthropology) の関与は、広範で、よりよい世界の理解のための関与であり、必ずしも権利を奪われた集団の解放や社会正義のための関与ではない。
  - また、政治的に関与する人類学者は問題について対立する見解を提示してきた。  
例：HTS に参加した人類学者は、軍人にローカルな文化や社会の内部の視点を提供することで、世界をよくすることに貢献したと信じている。
- ・他方で、著者は公共人類学が概念および、学界の外部での人類学の役割に関して批判的で反省的であるべきだということに同意している。
- この意味で、重なるところはあるにせよ公共人類学は応用人類学とは同じではない。
  - 応用人類学は、しばしば政策人類学であり、委託した人によって規定された特定の目的に関与するのに対し、公共人類学は周囲の世界との対話を通じて柔軟に発展する。
- ・ボロフスキーが挙げている公共人類学の 2 つの原則

①公共的説明責任

- 人類学のアカデミズムに縛られない考えのやりとりへの参加に関与する。

②問題解決を枠づけ制限する構造を理解する試み

- ローカルな集団が関心のある問題に取り組み、それを新しいやり方で枠付けする。

- ・②に関与することの課題はローカルコミュニティのニーズの特定に関わる。

- というのも、コミュニティは多様で、重要な問題については割れる。
- 人々には様々な立場や要望、見解があり、「人々の側につく」だけでは十分ではない。

### 書き手としての公共人類学者 pp.723-724

- ・公共人類学は必ずしも社会問題に直接応用可能なわけではない。
- 著者は近年一般向けにノルウェーのごみについての本を出版した。
- 本の目的は、読者に「価値のあるもの／がらくた」についての考え方を再考してもらうことで、なにか規範的な価値を提示したわけではない。
- 方法論的なポイントは書くスタイルとさまざまな読者に呼びかけるやり方だ。

### 公に向かうことの見返りと危険 pp.724-725

- ・公共人類学の支持者は、近年、現実世界の実際の問題から離れたままであり、同僚からの引用数を重視する「純粋に学術的な」人類学を軽蔑していることがある。

- ボロフスキーは「「プロの」学者になるということは、多くの場合、人々の実際の問題を回避し、代わりに現状を脅かさない問題に焦点を当てることを意味する」と論じる。
- この見方にはいくらかの真実があるが、公共人類学はすべての人のためではないことを心に留めておく必要がある。

① 理論的、分析的に優れた執筆にはスキルが必要だが、非学術的な聴衆のための執筆も別のやりかたで難しく、誰もがそれをできるわけではない。

② 多くの場合高度に政治化された状況で、幅広い人々と関わることには、すべての学術研究者が準備または動機付けられているわけではないので挑戦的だ。これは、人類学者が一種のアクションリサーチ、公的介入、批判的分析に参加するという、公共人類学や市民的関与の両方に等しく当てはまり得る。

- ・自らの知識と視点を持って公になることの見返りと危険は、同じコインの両面だ。それは、必然的に論争に巻き込まれるということだ。

- 著者の亡き元同僚は、国内新聞に学術論文の簡略版を掲載し、公共人類学の難しさに気づいた。
- 元の論文 (Gullestad 2004) は、「ノルウェーらしさ」のカテゴリーから黒人を除外するノルウェーの精神図式の分析だった。例として、首都郊外の森林地帯でアフリカ系

- の人のジョギングが多くの人種を驚かせたときの状況を使用した。
- ガレスタッドの短い新聞記事に基づいて、「ヒステリックなポリティカル・コレクティブネス」と状況の誤解という理由で、多くの批判的コメントがなされた。
  - 媒介された公共圏での公開討論は、セミナー室の討論とは対照的に、加速化され、論争的で、無礼で、政治化される。
  - どちらが優れているかについての明確な答えはなく、幅広い聴衆が常に学術的な聴衆よりも優れていると主張することは、ポピュリストであり反知性主義でもある。

### 市民的関与としての公共人類学 pp.725-727

・公共人類学と純粋に学術的な人類学を区別するのは知識の生産と普及へのアプローチだ。多くの人々に関わりを持つ人類学は、変化のための市民的関与から構成され、そこでは、特定の目的を念頭に置いて調査中のコミュニティと協力して知識が生み出される。

- 人類学者を含む南アメリカの研究チームによる非倫理的な行動を記録した本が出た2000年の秋、地域社会に対する倫理的義務についての議論が激化した。
  - 最も深刻な主張は最終的に反証されたが、AAA<sup>2</sup>委員会は後に、フィールド人類学者のためのいくつかの一般的な倫理的概要を設定し、以前は一般的であったものよりも研究の共同の (collaborative) 性質をより強く強調した。
- ・共同民族誌には、データの収集または生成に関連する問題がある。
- 古典的な人類学では、フィールドワーク中の主体と対象の関係は疑う余地がない。民族誌学者は質問をし、観察し、メモを取る。
  - 1980年代の「反省的転回」に続いて、人類学者はしばしばテキストの中で自分自身を位置づけたが、著者の問題を問題にすることはなかった。
  - 対照的に、共同民族誌は、方法論の権威と妥当性の問題を提起する。著者性は多くの場合、人類学者に帰属するが、人類学者は多かれ少なかれ、コミュニティの利益の代弁人として自分自身を描写する。
- ・ただし、明確な政治的アジェンダを念頭に置くと、データの生成は必然的に歪曲されるはず。すでに答えがあるのなら、なぜわざわざ調査をするのか。
- この異議に対する合理的な反論は、最初から「何」(たとえば、きれいな飲料水、薬物関連の暴力が少ないなど) に対する答えはあるかもしれないが、「どのように」に対する答えはないかもしれないということだ。
  - さらに、規範的に導かれた研究が「純粋な研究」よりも有効性の低い知識を生み出すと仮定するア・プリオリな理由はない。
  - あらゆる研究は、研究者の個人的な興味、主題、フィールドワーク以前に受けた理論

---

<sup>2</sup> アメリカ人類学会

的および方法論的トレーニングに何らかの形で傾斜している。

- ・しかし、公共的で政治的に関与した人類学を、一方的で、高尚な学術研究よりも信頼性が低いとする異議は、単純に払拭することはできない。
  - 科学的発見に不可欠な知的驚きの要素は、純粋に好奇心に基づくプロジェクトに比べ、政治的に導かれた研究ではあまり目立たない。
  - それでも、ジャンルが混ざり合い、現実のさまざまな解釈が「進むにつれて」直面する、公共人類学に特徴的な人類学を行い、書くことの不純な形態は、それほど要求が厳しくなく、少なくともその方法を明らかにすることができる。
  - 人類学者が目的についてオープンで誠実である限り、関与した (engaged) 人類学の信憑性を疑う理由はない。いくつかの方法論的な課題があるが、克服できないものではない。
- ・それにもかかわらず、委託された（「応用された」）かどうかにかかわらず、社会の変化に貢献することを明示的に目的とする人類学的研究は、分離が知的完全性の保証と見なされる人類学の学術的な出版の上位層から遠く離れていることは事実だ。
  - 公的、共同的、または行動人類学の支持者によってめったに議論されない問題は、誰を代表し、誰の利益を擁護するかに関するものだ。
  - 誰の地域の利益を代表すべきか、それをどのように行うべきか、は必ずしも明白ではない。意見は、政策立案者、地元住民、と同じように人類学者の間でも分かれている。
  - この点で、すべての人類学者がほぼ同じ政治的見解を持ち、健全な倫理的判断を下す特権的な立場にあることが当然と考えれば、人類学はそれ自体の内部の多様性と知的開放性に問題があると言える。
- ・それでも、人類学者は地元住民が直面している課題や問題を分析する際に孤立して中立的でいるのではなく、研究する人々の幸福に反する構造的条件を明らかにする義務がある、という Schepers-Hughes の主張は重要だ。そうすることで、真に公共人類学は「力への真理を語る (speak truth to power)」と同時に、優れた研究を生み出す可能性がある。

### 学際的な公共人類学 pp.727-728

- ・公共人類学を実行する別の方法は、学際的な対話に関与することだ。
  - いくつかの点で、ここでの方法論の課題は、市民的関与の課題と似ている。どちらの場合も、**翻訳スキル**<sup>3</sup>が不可欠だ。私たちの経歴、訓練、読書、信念によって形作られ

---

<sup>3</sup> 「翻訳」はここではキータームである。英人類学では人類学者の仕事を「文化の翻訳」と喩えてきた。また人類学内部で人類学以外の学問分野の理論や方法を持ってくるといふこれまで行ってきた営みも翻訳と捉えることができる。

た、位置づけられた知識は、他者の知識と対峙する。対立は不可避だが、地平の融合が可能であり、相互に豊かになる。

- さらに、どちらの場合も重要なことが危機に瀕している可能性がある。青少年を薬物中毒から救うために地域社会で働くことは、ネオダーウィニズムの還元主義を批判するよりもすぐに称賛に値するよう見えるかもしれないが、後者は同じように必要であり、前者と同様に人類に有益な効果をもたらす可能性がある。
  - 人類学者の重要な方法論的スキルである文化の翻訳は、両方の取り組みの中核だ。
- ・自然科学者は通常、「客観的に見た人間とは何か？」と尋ねるのに対し、社会・文化人類学者は「人間であるとはどういう意味か？」と尋ねるかもしれない。
- 他者の生活世界を理解することに興味があるなら、文化相対主義の方法を使わなければならない。それは、単に、彼らの世界の見方を学ぶ努力をすることを必要とする。
  - 他者がどのような社会的に構築された世界に住んでいるのかを同僚や学生などに説明することが重要。
- ・以前、著者は社会構築主義について、医者との長い新聞討論に引き込まれた。
- 医者は社会構築主義のことを怠惰で無責任な相対主義と考えていた。彼は HIV と AIDS の長期的な研究者でありアドバイザーでだったが、病気の文化的側面に時間を割いていなかったが、しかし、医療従事者と研究者は、キャンペーンを円滑に進めるために、現地で病気がどのように考えられているのか（例えば、呪術の実践と関連しているなど）を知っていた方がよい。
- ・学際的な公共人類学からの洞察は、すべての真実は部分的であり、方法論的なアドバイスの一部は、「先住民の視点」を獲得し、先住民（生物学者、ジャーナリスト、医学者）にこちら側の視点を獲得するように促すことだ。
- 学際的な対話をしないと、人類学者も無能な文化の仲介者や翻訳者になってしまう。

### 純粹ではないジャンル pp.728-729

公共人類学者は公共言説の境界を作り出すのと同時に、学問的生活の慣習に挑戦する。

- 彼らの多くは、不安定に学問的地位に固執するかアカデミーの内外にいて、ニュースメディアやブログに寄稿したり、オープンなフォーラムを運営したりすることもある。
- ・人類学者が運営するウェブサイトは、現実やニュース項目と相互作用し、学術記事に特徴的な閉鎖回路や遅いリズムから異なる考えアイデアの相互作用の場として機能する。
- この公共圏や新聞などの印刷媒体への貢献には、通常の学術出版に必要とされるものとは異なる考え方、文体の調整が必要だ。

- 一般の聴衆のために人類学的議論を始める前に、日常生活の話をしたり、ニュース記事に言及したりすることが推奨される。その結果「純粋でない」テキストになり得る。
- ・おそらく、非学術的な聴衆のために人類学的に情報に基づいたテキストを書くときに最も難しい課題は、スタイルやコンテンツではなく、スピードに関係することだ。
  - 査読や校正があるので学術出版物は執筆から出版までに時間がかかる一方で、ブログや新聞記事はすぐに公開される。
  - また、応答は即時かつ直接的で、フィルタリングされておらず、人類学者が常に対処する準備ができているとは限らないやり方で頻繁に政治化されている。
- ・媒介されたコミュニケーションには長所と短所がある。これまでに言及されたメディアの中で、ブログはおそらく会話に最も近く、Facebook と Twitter はさらに即時的だ。
  - 他のメディアは、学術出版物と比較してその加速された性格にもかかわらず、声明と応答の間に遅延を組み込んでいる。テレビへの出演は本質的に一方向的で、視聴者からの反応も多くの場合はない。
  - 著者の経験では、公開会議はテレビ出演よりもはるかに満足のいくものになる傾向がある。このようなフォーラムでは、人類学的に関連するトピックについて講演する特権があれば、応答は即時、双方向、動的であり、実際の議論を行うことができる。

### 大衆化か、批判的干渉か pp.729-730

- ・公共人類学者の中で最も公的なものは、公共圏にありふれてなければならない。しかし、大衆化は公共人類学と同じものではなく、この2つは互いに対立する可能性がある。
  - 原則として、最も人気のある本が最も重要な本になることはめったにない。後者は抵抗を提供し、娯楽ではなく挑戦的な傾向があり、多くの場合痛みを伴う。
- ・公共人類学のほとんどのスポークスパーソンは、批判的であることを重視している。
  - 比較の方法、グローバルな視点、そして特に日常の経験の観点から世界を見ることへの関与を考えれば、人類学者が現状を批判的に見る必要があることは自明に思える。
  - 公共人類学の主な目的は権力に対して真実を話すことだが、真実は部分的であるため、一部の公共人類学者が権力に忠実な公衆の一部を表象する、あるいは自分を重ね合わせることは排除されえない。
- ・それにもかかわらず、普及者と公共人類学者は必ずしも同じ人物であるとは限らない。
  - 実際、彼らは互いに対立する可能性がある。人気を得るために、普及者は幅広い感情に迎合する必要がある。時には明白なことを述べ、時には想像された読者によってすでに半意識的に保持されている概念の適切で正確な言い回しを与える。

- 普及者は、読者に自身が彼らの味方であることを納得させなければならない。重要な知識人は、不人気なことを印象的な方法で言う義務がある。
- ・大都市の人類学者が権力に反対して語ることによってどの程度個人的なリスクを冒すかについては議論の余地がある。
  - スリランカ紛争における社会科学者の役割について、紛争地域の国内知識人は、学者であろうとなかろうと、外国の民族誌学者よりもはるかに大きなリスクを冒している。
  - より難しい問題は、人類学者が権力に反対して話すことを義務付けられている程度と、彼らがそれを効率的に行うことができる範囲に関するものだ。人類学が単に世界の複雑さを示すだけでは、世界を変える可能性は低いとも言われている。
  - 代替として、エスノセントリズムや見下しではない一般化と単純化が提案されている。
- ・普及者の役割と一般の知識人の役割との間の、明白で紛れもない矛盾にもかかわらず、多くの人は役割をうまく組み合わせているようだ。
  - この伝統は深く根付いている。マーガレット・ミードとマーヴィン・ハリスは普及者として嘲笑されつつも、人類学をアカデミーの外で可視化するために多くのことをした。これらの役割を組み合わせる学者は、挑発的で挑戦的なやり方で普及に努める。
  - これは、他の人の既存の世界観を確認する一方で、対象となる集団の一部によって斬新でスキャンダラスであると認識される主張を作成することでなされる場合もある。
  - 社会・文化批判の道具としての人類学を、離れた場所でも本拠地でも使うことで、方法論的な問題が発生するため、学術的な言説の翻訳、ジャンルやスタイルに関する作業、スピードへの対応、政治化などが問題となる。
  - 主な課題は、自称公共人類学者の多くが同意しているように、方法の問題ではなく、アイデンティティの問題である。公共人類学は純粋な学術研究に比べ、アカデミアではあまり重要視されていない。

### 主流の活動としての公共人類学 p.731

- ・この章の多くの事例に照らし出されているように、公共人類学者にとっての主要な方法論的課題は、広義の意味での翻訳に関するものである。
  - アカデミアの内部言語を、問題となる聴衆に適した言語に翻訳する必要がある。研究課題は、対象となるグループにとって関連性がある、あるいは解放的であると認識される課題に翻訳される必要がある。
  - 多くの公共人類学の共同作業的な性格は、両方向の概念や視点を翻訳することを必要とする。また、公共人類学が学際性を伴う場合には、学習の伝統の間での翻訳が不可欠である。



・それにもかかわらず、公共人類学者にとっての最大の課題は、ヒエラルキーや象徴的な資本、そして学者生活や学術的キャリアを規定する慣習から自分自身を解放することであるように思われる。

- 近年、公共人類学を定義しようとしてきた人類学者のほとんどは、社会に貢献するために支払うべき代償は学術的に評価されないことにあるということに同意する。
- このような背景を踏まえると、公共人類学は、人類学の活動の中でも主流で中核の活動になる可能性を秘めていると、結論として主張するのが適切かもしれない。
- これは人類学が特定の政治的課題を代表すべきいうことではない。それは知的自殺だ。
- また、人類学者は、漠然と非学術的な読者のために書くべきではない。それは我々の分析や方法論的な厳密さを弱めることになる。
- 著者が考える人類学は、文化的、社会的、専門的、知的など、さまざまな世界が交差する交差点にある学問であり、少なくとも、私たちの研究成果を認可する学界と、私たちが行っていることの本質を担っている人々との間の交差点にある学問であり、知的生活の中で重要な架け橋となる可能性があるということだ。

・これまで、公共人類学を支持する 4 つの論拠が挙げられた。そのすべてが方法論的な問題を提起している。

- ①比較の視点とそれに付随する異化は、人類学に相応しいものである。社会は大きく異なっていたかもしれない、あなたと私は別の価値観を持っていたかもしれない、という洞察は、人類学が人類に与えた最大の贈り物の一つである。
- ②インサイダーの視点、「普通の人々」の生きた経験、彼らの生活世界の質感を優先するという人類学的な主張は差異を生み出すことができる。公共人類学者は、メディア向けの執筆スキルを向上させ、より説得力のある方法で感情的なものと啓発的なものを混ぜ合わせる必要がある。
- ③人類学者は、軍拡の領域であれ、生物学的決定論の領域であれ、よりニュアンスのある複雑な見解を主張することで、過剰な単純化を暴くことにむしろ長けているが、ここでもまた、より良いコミュニケーターになる必要がある。
- ④人類学者（さらには学者）は、自明なことを述べることをあまり恐れないようにすべきだ。象牙の塔の外の意図された聴衆は、ポスト開発とポスト構造主義の違いもわからないかもしれないが、だからといって、彼らが愚かであるとか、彼らの関心事が無関係であるという意味ではない。

・その結果、人間の多様性を理解し、身近なものを風変わりな、そして風変わりなものを身近なものにするという、この学問の本来の理想に忠実でありながら、「ボーダーレスな世界で人類学を実践する」というハイブリッドな方法が生まれてくるかもしれない。このことは、将来的には大きな解放の可能性と方法論的な課題の両方を秘めている。